

崖の上で踊る

石持浅海

第一回

知っているよ。わたしたちが、崖の上で踊っているという話を。
足を踏み外して、崖下に転落してしまうかもしれない。
でもね。

わたしはやめないよ。踊りきるまで。

第一章 作戦開始

笛木雅也ふえき まさやの死体は、浴槽よくせうに放置した。

湯つに浸かっているながら肌は青白く、対照的に溜められた湯は真っ赤に染まっている。血液が体内から湯に移動したことがはっきりわかる光景だった。

高原絵麻たかはら えまは、宙に浮いたような感覚に陥っていた。

殺人を目の当たりにした恐怖も、それに自分が関わっているという罪悪感も感じていない。かといって、目的のひとつを達成したという高揚感もない。すべてが現実感を失っている。ただひとついえることは、あれほど自分を悩ませてきた偏頭痛を、今はまったく感じていないということだ。

「食堂に戻ろう」

吉崎修平よしざき しゅうへいが言い、自ら率先して部屋を出た。全員ならが倣う。客室のある二階から一階に降り、廊下を歩いて奥の食堂に入った。

食堂には、四人が使える正方形のテーブルが、十二卓ある。客室も十二室。つまりこの保養所は、十二組が同時に宿泊できるようになっているわけだ。株式会社フウジンブレードは、新興のベンチャー企業だ。急成長しているとはいえ、会社の規模と比べると保養所

大きさは過剰に思える。創業者であり現役の社長でもある中道武史なかみちたけしの性格が出ているのかもしれない。中道は、なんでも大きく見せるのが好きなのだ。会社も、事業も、自分自身も。

現在ここにいる——生きてここにいる——のは十人だから、テーブルを四つつなげて使っている。その出入口から見て最奥に、一橋いちし創太そうたが座っていた。一橋は戻ってきた絵麻たちを見て、片手を振った。

「どうだった？」

「うまくいったよ」

吉崎が椅子に座りながら答える。人間は自然と最初に座った席を定位置にしたがるものだ。吉崎もまた、この保養所に来て最初に選んだ席に座った。窓を背にした中央に。

「もう、笛木が呼吸することはない。一橋さんは自分で手を下したかっただろうけど、こういったことは、個人的な恨みうらみを持っていない人間の方がいい」

だから自分がやったんだ——口に出しては言わなかったけれど、顔にそう書いてある。

一橋は素っ気なくうなずいた。

「どうでもいいよ。あいつが死んでくれさえすれば」

「一橋さんは」花田千里はなだちさとが青年の隣にかけながら言った。「目的を

達したら、会社に戻るの？」

一橋は、同じ仕草で正反対の動きをした。首を振ったのだ。

「戻らないよ。あの会社に未練はないし、今の仕事が気に入っているんだ」

あの会社に未練はない——一橋はそう言った。しかしニュアンスは少し違うのかもしれない。自分がフウジンブレードの社員だったことを、思い出したくないのではないか。それくらい強い思いがないと、かつての上司殺害に手を貸したりしないだろう。

一橋が口を閉ざすと、食堂に沈黙が落ちた。しばらくの間、誰もが無言だった。祝杯をあげようとビールを取り出す者もおらず、気を落ち着かせるためにコーヒ―を淹いれようとする者もない。ただ、黙もくって虚空を見つめていた。ロールカーテンを閉めているから、昼間なのにやや薄暗い。それでも照明を点つけようとする者すらいなかった。

窓を背にした中央に、吉崎が座っている。右隣には福王ふくおう亜麻音あまね。

吉崎は大柄だし、亜麻音も女性としては背が高い。二人揃そろって声も大きいから、自然と二人がリーダー格となっている。いや、自然とではないか。二人が意識的にリーダーシップを取ろうとしているのは明らかだ。なぜ部外者が、と思わないではない。それでも彼らの行動力がなければ、自分たちの思いは形にならなかった。その意味

「では、感謝すべきなのだろう。」

三分ほど経ったところで、吉崎が口を開いた。

「笛木は、死をもって自らの罪を償った」

宣言するような口調だった。しかし左隣に座る江角孝人が口を挟んだ。

「いや」江角はテーブルに両肘をつき、顔の前で両手を組んでいる。思い詰めたような表情。やせた、しわの目立つ両手が、わずかに震えた。「死んでも、奴の罪は消えない。俺の息子を殺した罪は」

ぐつぐつと泥が煮えるような声だった。殺しても飽き足らない、という表現がある。今の江角は、まさしくそんな心情なのだろう。

傍らの、息子の遺影に手をかける。額縁が手の震えを伝えて、カタカタと音を立てた。

「まあまあ」吉崎が苦笑交じりに応えた。「江角さんの言うとおり、奴のやったことは、決して許されることじゃない。でも今は、彼の冥福を祈ろうじゃないか」

「そうそう」

諏訪沙月が妙に明るい声で言った。「死んだらチャラ。そうでしょう?」

唇の両端がつり上がっている。酷薄な笑み。沙月はかなり整った顔だちをしている。そんな彼女が薄笑いを浮かべると、ぞっとする

ような凄^{すこ}みを感じる。冷え冷えとした笑顔は、笛木の人權とか尊厳を丸ごと否定していた。

沙月は、別れた夫には、もう愛情を感じていないはずだ。むしろ本性がわかって、離婚してよかったと言っていた。かといってフウジンブレードより夫の方を憎んでいるわけではない。自分の生活をめちやくちやにした責任は、あくまで企業にある。その点はぶれていないようだ。

「それに、笛木は大切な情報を提供してくれました」

亜麻音が後を引き取る。計画を始める際、お互いに敬語を使うのはやめようと決めた。同志である以上、全員が同格だからだ。しかし亜麻音だけは、ずっと丁寧語を使っている。メンバー最年少だからか、それとも自分だけがまだ学生だからか。それはわからないけれど、丁寧なのは語尾だけだ。口調や声の大きさは、他を圧倒しようという意図⁺が透⁺けて見えるものだった。虚勢ではない。自分に本当に自信がないと、このような声は出せない。

自信。亜麻音自身は、正義と言い換えるだろう。自分は正義を行っているのだと。正義による殺人は、正しいのだと。背の高い女子大学生は、そう信じて疑っていない口調で続けた。

「笛木は、中道と西山^{にしやま}の行動予定を調べてくれましたから」

うつむいていた菊野時夫^{きくのときお}が顔を上げた。銀縁眼鏡の奥から、亜麻

音を見つめる。まるで正面に座る女子大生が、中道本人であるかのように。

「中道……」

絞り出すような声だった。絵麻たちと違って、菊野の憎悪は社長である中道武史一人に向けられている。開発部長である笛木雅也も、専務の西山和則も、眼中にない。他のメンバーの手を借りて中道を殺すことができるのであれば、代わりに笛木と西山を殺害する手助けをする。当初から彼はそう公言していた。

「残念だけど、今日は殺せないよ」

奥本瞳が手綱を引くように言った。「聞いてたでしょ。中道が帰国するのは明日。決行は明後日だよ。五月五日」

「わかってるよ」

まるで母親に拗ねてみせるように、菊野が答える。菊野は確か、絵麻と同じ二十五歳だ。一方の瞳は四十代初め。親子というには歳が近すぎる。それでも菊野には子供っぽいところがあり、逆に瞳は実年齢よりも老けて見える。だから見た目には、親子といわれても信じてしまいそうになる。

小太りの体型。荒れた肌。それらが瞳を老けて見せているのだ。瞳は自身の変化について「苦勞が多いから」と説明している。苦勞の原因は、もちろん中道が経営している会社だ。標的すべてを殺害

したあかつき暁には、自らも若さを取り戻せる。そう信じているのかもしれない。

「そういえば、世間は三連休なんだよね」

のんびりした声で雨森勇大あまもりゆうたが言った。「二日に有休を取って七連休にしている人もいるだろうし、中には六日も休んで十連休にしている人もいると思う。そんないい並びなのに、メインの五月三、四、五日に保養所を利用する社員がいない。那須高原なすといえば、ゴールデンウィークを過ごすには、絶好の場所なのね。社員たちの、会社に対する気持ちが透けて見えるようだ」

瞳が苦々しい顔で雨森を見た。話を逸らすなど言いたげだ。もともと、雨森ははじめからこんな調子だ。会に参加したときから、本当にフウジンブレードを恨んでいるのかすら、よくわからない雰囲気だった。それは、標的の一人である笛木を殺害した後も同じだ。よくいえば飄々ひょうひょうと、悪くいえばぼんやりとした顔のままだ。絵麻とたいして違わない若さなのに、青年らしい覇気はきが感じられない。これも、フウジンブレードがもたらした結果なのだろうか。

もつとも、傍観者を決め込んでいるとか、自ら手を汚したくないと考えているわけではなさそうだ。主に吉崎が中心になって考えた計画について、的確な改善案を提示し続けてきたのは雨森だったのだから。

「そう思うよ」

花田千里が大きくなずいた。「弟が言ってた。休みの日にまで、会社のことを考えたくないって。社員はみんな同じだとも言ってたよ」

千里の眉間みけんにしわが寄った。死んでしまった弟のことを思い出したのだろうか。それでも、ずいぶんマシになった。会に参加した当初は、弟の話題が出ただけで呼吸困難を起こしかけていた。自分から口に出せるだけ、回復してきたといえる。恨みの対象を殺害すると決心したことで、支えができたのかもしれない。

「その点では」亜麻音が強引に話を戻した。

「一橋さんがメンバーにいてくれて、本当に助かりました。もし一橋さんがいなかったなら、今回の計画は最初から成り立ちませんでしたから」

全員の視線が、一橋創太を捉とらえる。功労者は、とろんとした眼をしていた。一橋は小太りな体型のうえ髪も長めになっている。そんな外見の男性が表情を弛緩しかんさせていると、非常にみっともなく見える。しかし絵麻たちは、一橋が頭が切れる人間だと知っているし、現在そのような目をしている理由も理解している。

「眠い？」

隣に座る千里が尋ねた。一橋は面倒くさそうになずいた。

「かなり。笛木がちゃんと死んでくれたから、気が抜けたのかな」

「寝てていいよ。必要があつたら起こすから」

千里はメンバーを見回した。誰もが賛同の表情を浮かべている。

というか、眠るしかない。だって、一橋は笛木と同じ眠剤を飲んだのだから。

「そうさせてもらうよ」

一橋がテーブルに突っ伏して目を閉じた。一分も経たないうちに寝息が聞こえてきた。

ふうっと雨森が息を吐いた。

「亜麻音さんの言うとおりだ。僕たちの計画は、一橋さんがいることが前提になっていた。事実、計画どおりに笛木を退治することができたわけだし。一橋さんに感謝すべきだろうな」

「本当にね」絵麻も眠る技術者に感謝の意を示した。「でも、これで日頃から上司の弱みは握っておくべきだと思ひ知ったよ」

笑いが起きた。

とつくにフウジンブレードを辞めた一橋の誘いに笛木が応じたのは、一橋が笛木の弱みを握っていたからだ。

笛木は女性社員と不倫関係にあった。その女性社員が、秘書室勤務で中道社長お気に入りとおっては、中道にばれたら激怒されるのは必至だ。新興ベンチャー企業で社長の逆鱗げきりんに触れることは、会社

にいられなくなることを意味する。口止めのためにも、笛木は一橋の誘いに応じざるを得なかった。

今日、絵麻たちは那須高原の保養所に笛木を連れてきて、彼のIDカードで無人の保養所に入った。そして備え付けのパソコンで情報を引き出させた後、客室のひとつに移動させた。そこで一橋が告げたのだ。

「飲んでください」

一橋は笛木に錠剤の入った包装を見せた。

「毒なんかじゃありません。その証拠に、僕も一緒に飲みます。どちらでも、選んでください。飲むための水も。笛木部長と心中するなんてまっぴらですから、安心していいですよ」

錠剤の包装はふたつ。ミネラルウォーターの入ったペットボトルもふたつ。

笛木はかつての部下——自分が追い出した——を怯おびえた目で見つめた。そして三十秒ほど逡巡した後、震える指先で片方の錠剤を指し示した。左の方。ペットボトルの水は、右の方を。一橋が素っ気なくうなずいた。

「こちらですね。わかりました。僕が飲みますから、笛木部長も続いて飲んでください」

一橋は指定された方の包材を取った。中の錠剤を取り出し、ため

らいなく口に入れる。これまた指定されたペットボトルを開栓し、中の水で錠剤を飲み下した。

一連の動作を見ていた笛木は、それでも怖々と錠剤を口に入れた。ペットボトルの水で飲み込む。その姿勢のまま、胸を押さえてじつとしていたが、自らの身体からだに変化が起こらないことに安堵あんどの息をついた。

笛木は、肉体的な拘束を受けていない。しかし十人も人間に取り囲まれていては、身動きひとつできない。動けずにいるうちに、客室のベッドに座った身体が揺れた。目からも光が失われていく。飲んだ眠剤が効いてきたのだ。

笛木に飲ませ、一橋も飲んだ錠剤は、一橋が説明したように決して毒薬などではない。不眠の症状を訴える絵麻に、医師が処方した眠剤だ。やがて笛木はがっくりと頭を垂れ、崩れるようにベッドに倒れ込んだ。

笛木が意識を失ったことを確かめて、一橋は一人食堂に戻った。残った絵麻たちは笛木の服を脱がせ、浴室に運んだ。湯を張った浴槽に笛木を寝かせ、右手に握らせたカッターで、左手首を切った。

そう。笛木を眠らせた眠剤は、絵麻が提供した。実際に笛木の首を切ったのは吉崎だ。だからといって、絵麻は自分の手が白いとは思っていない。単に計画に参加した、一緒に殺害計画を練った以

上の貢献を、絵麻はしている。今さら自分だけ罪を逃れようとは思っていない。

いや、それは正確ではないか。殺人が犯罪だということはわかっている。でも、だからといって自分たちが逮捕されるべきとは、まったく考えていない。悪いのは、フウジンブレードの方だ。自分たちは、正当な権利を行使しただけ。部外者である吉崎と亜麻音以外の全員が、そう考えている。自分たちにとっては、逮捕されることこそが理不尽なのだ。こんなふうを考える犯罪者を、何て言うんだっけ。そうだ。確信犯だ。

「フウジンブレードの社員たちに愛社精神がないのはわかった」

吉崎が会社と社員たちを馬鹿にするような笑みを浮かべた。「おかげで、俺たちは保養所を使い放題だ。今日と明日、ここに潜伏しよう。利用者が来ないときはスタッフもいない。でもインフラは生きている。しかも利用予定表から、誰も来ないことがはっきりしている。隠れるには最適な場所だな」

「そのつもりで、食料もお酒も買い込んだんでしょ？」

瞳の指摘に、吉崎は真面目な顔でうなずいた。「うん」

「心配なのは、笛木と連絡が取れないって誰かが騒ぎ出すことだけ」

絵麻が指摘すると、千里が首を振った。先ほどの一橋と同じ仕草

だ。

「大丈夫だよ。笛木は、奥さんには出張だと嘘をついて、愛人と旅行に行く予定だったんだから」

「そしてその愛人には『急に出勤が入ったから旅行に行けなくなつた』って、笛木に電話させてたものね」

沙月が言い添える。

「うん。かなりうわずつた声だったから、愛人は浮気がばれたと思つたかもしれないな。だったらなおのこと、笛木とは連絡を取りづらিদらう。心配ない。一、二、三日はばれないよ」

周到な連中だ。しかも、見事なまでに息が合っている。お互いに接点がるでなくて、年齢も性格もバラバラな十人がここまで協力し合えるのは、全員がフウジンブレードとその幹部に対して復讐心ふくしゅうを抱いているからに他ならない。

「それにしても」

冷え冷えとした笑みを顔に貼り付けたまま、沙月が言った。「復讐って、こんなにスッキリするものだったんだね。もっと早くやればよかった」

本音だということは、表情からも声の響きからもわかる。被害者の会ではじめて会ったとき、沙月はボロボロだった。髪はボサボサで、肌は荒れていた。そしてなによりも表情が暗かった。そして絵

麻と同様、偏頭痛に顔をしかめていた。

偏頭痛。被害者の会に集まった人たちの、共通した症状だ。

沙月が絵麻を見た。

「わたしは、今ものすごく調子いいよ。絵麻ちゃんは？」

言いたいことはわかる。彼女もまた、偏頭痛から解放されている

のだろう。おそらくは、笛木の死を目の当たりにすることによって。

「スッキリは、してるね」絵麻は正直に答えた。「頭が痛くないなんて、久しぶりだよ」

「やっぱり」

沙月がにんまりと笑った。「あと二人殺せば、完全に解放されるのかな」

「じゃあ、沙月さんの健康のためにも、確実に殺さなきゃな」

吉崎が話を進めた。テーブルの上には、中道と西山のスケジュール表が載っている。笛木が本社のサーバーにアクセスして印刷したものだ。一人につき一枚ある。実際はそんなに印刷する必要はないのだけれど、どうせフウジンブレードの財産だ。用紙代もインク代も自分たちの負担ではない。

「西山は明日でも殺せるけど、中道は明後日しかないね」

雨森の口調は、まるでピクニックの予定を決めるようだ。

「みんな、一日でも早く殺したいだろうけど、西山を先に殺してし

まうと、中道に勘づかれて警戒されてしまう危険がある。やっぱり、二人とも明後日、五日に殺した方がいいね」

瞳が不満そうに眉間にしわを寄せたけれど、口に出しては何も言わなかった。雨森の意見が正しいことを知っているからだ。

雨森が目の前のコピー用紙を指し示した。

「中道は明日、五月四日の夜に帰国する。成田空港から自宅までまっすぐ帰るかどうかわからないけれど、ここで殺すチャンスはない。狙いは五日だ。中道は入社することになっている。ゴールドenウィークを海外出張に充てて、次の日にも休日出勤とはご苦労なことだけど、それは奴の勝手だ」

「その休日出勤が、人生最後の仕事になるとも知らずにな」

江角が昏い笑みを浮かべた。荒んだ顔が、これまでの苦労を想像させる。そしてフウジンブレードに対する憎しみも。

「これだね」

菊野がネックストラップを取り上げた。カードホルダーには、笛木のIDカードが入っている。「こいつがあれば、フウジンブレードの本社に入れる。本社には、営業車の鍵もある」

「会社の駐車場は、ビルの裏手」千里が自らの掌を指すように言った。「営業車も駐めてあるし、社長専用の駐車スペースもある」

千里は丸顔に黒縁眼鏡をかけている。レンズの奥の瞳はくりくり

としていて、愛嬌のある顔だちだ。しかし今は、人殺しの算段をしている最中だ。持ち前の愛嬌は、不気味さに取って代わられていた。「そこが、あいつの墓場か」

当初吉崎が考えた案は、本社オフィスに身を潜めて中道を待つって、姿を現したところを襲いかかるというものだった。しかし前回の打ち合わせの際、雨森が異を唱えた。

「中道が武道の達人かどうかは知らないけど、こちらも素人だ。そんなに簡単に殺せるかな」

吉崎が眉間にしわを寄せた。この男は、反論されるのを嫌う。

「こっちは十人だけ。多勢に無勢だ」

「誰だって殺されたくない」

雨森はのんびりした口調を崩さない。

「大暴れする相手を、力尽くで押さえつけるのにも手間がかかる。走って逃げられたり、大声を出されたらまずい。できるだけ失敗のリスクを下げて、確実に殺せる方法を考えよう」

「どうやって、ですか？」

亜麻音が仏頂面ぶつちやうめんで訊いた。吉崎への反論を、まるで自分に対する侮辱おごのように感じているのかもしれない。雨森は若い仲間に向かつて微笑ほほえんでみせた。

「もつと楽をしよう」

そんなことを言った。

「さつきも言ったとおり、僕たちは暴力の素人だ。しろウトしかも半分は女性。腕つぶしでなんとかしようと思わない方がいい。僕たちは文明人だ。文明の利器を利用しよう」

吉崎が表情を険しくした。「拳銃けんじゆうでも使うのか？」

「僕は持っていないよ」雨森は真面目な顔で答えた。「吉崎さんは持っているの？」

「持っていない」

「うん」雨森はうなずいた。「でも、運転免許証は持っている」

「運転免許証？」思わず絵麻は繰り返した。「車を使うの？」

江角が目を丸くする。「轢き殺す？」

「違う違う」雨森は手を振った。「中道は自分で車を運転して、会社の駐車場に車を止める。会社の通用口から入るまでの距離は数メートル。車で轢き殺すのは難しい」

「じゃあ——」

「中道の車は、オープンカーじゃない」

雨森は持ち込んだ鞆から写真を一枚取り出した。フウジンブレードの駐車場で隠し撮りした、中道の愛車。ドイツ製のツードアクーペだ。

「中道の愛車はドアが二枚しかないし、屋根もある。ドアを開かな

いようにしたら、脱出できない」

「でも」千里が写真を見つめながら反論する。「窓があるじゃない」

「あるね」雨森は写真のサイドウィンドウを指さした。「でも、窓を開けても外に出られないようにしたら、どうだろう。人間が通れる隙間を作らないという意味だ。そのための道具も、会社の駐車場になら、ある」

「あっ！」

元社員だった一橋が、察したように声を上げた。「そうか、営業車」

「正解」雨森が人差し指を立てた。その人差し指を、また写真に向ける。

「会社の駐車場には、営業車が駐まっている。もちろん普通は、ドアが開けられるよう間隔を空けて駐める。でも、わざと間隔を詰めればどうだろう。ドアとドアが擦れるくらいに。中道が車を乗り入れた途端、営業車を幅寄せして駐めれば、ドアは開かなくなるし、窓を開けても出られない」

「営業車の鍵は、オフィスにある」

一橋が後を引き取った。「俺たちは、まず笛木を殺して奴のＩＤカードを奪う計画を立てている。オフィスに身を潜めて中道を待つ

んじゃないく、営業車に身を潜めていればいいのか」

「わかったぞ」

吉崎が大声を出した。先ほどまで険しい顔をしていたのに、今度は目を大きく見開いている。

「そうやって中道を閉じこめれば、こつちのものだ。脱出用のハンマーで外から小さな穴を開けて灯油でも流し込めばいい。あいつは狭い車内で生きてままだ火葬される」

「わあ」雨森が無邪気な声を上げた。「吉崎さんって、怖いなあ」こわ

もちろん雨森は、はじめからそう考えていたのだろう。目が笑っている。

「いいんじゃない？ それ」

瞳がぶつきらぼうに言った。そしてフリーターの若者に顔を向ける。「火のついたマッチを投げ込むのは、菊野くんにやらせてあげるよ」

こうやって、中道の殺害方法は決まった。

今のところ、計画どおりに進んでいる。笛木殺害は成功したし、彼のIDカードも奪うことができた。もちろん、これで中道殺害は成功したも同然と言う気はない。でも、うまくいっているという手応えは必要だ。

「西山の五日の予定はゴルフだ」

コピー用紙を指し示しながら、江角が言った。「しかも、場所は那須高原。この近所だ」

「でも、会社の保養所は使わない」

「会社の保養所なんて、一般社員が使うものだと思うてるんだよ」

吉崎が解説した。「自分たち経営陣は、もつといいホテルに泊まる。経営陣の思考回路は、そんなふうに来ている」

「たかだかベンチャー企業の専務ふぜいが？」

瞳が鼻で嗤^{わら}った。「おこがましい」

「まあまあ」沙月が冷ややかな声でなだめる。「最後の夢くらい、見させてあげましょうよ」

雨森が腕組みした。

「厄介なのは、ゴルフってのは一人でやるわけじゃないことだな。必ず誰かと一緒だし、ゴールデンウィークだから他の客も多い。なかなか一人にならない。中道と同じ手段を使おうにも、休日のゴルフ場なら駐車場にも誰かしらいるだろう。殺しそこなうか、殺せても僕たちが逃げられないかもしれない」

「捕まるのはごめんだよ」

菊野が放り出すように言った。「なんで、あいつらを殺して捕まらなきゃならないんだ。表彰されるのならともかく」

「表彰はともかく」絵麻は苦笑した。ここにも、確信犯がいる。

「実際、どうしようか。中道殺しと時間はあんまり空けない方がいいよね。片方が生きていると、事件の一報が入る危険性があるわけだし。せつかく同じ日を選んででも警戒されちゃう」

「中道は朝だな」吉崎がスケジュール表を取った。「予定では午前九時出社となってるけど、それは目安だろう。休日だから、もう少しゆっくり来るかもしれない。それでも午前中なのは間違いないと思う」

「他に休日出勤する社員がいるかもよ」

沙月が口を挟む。「一橋さんや千里さんの話からも、フウジンブレードが超ブラック企業なのは間違いない。ゴールデンウィーク無視で働かせてもおかしくない」

「だったら、本社に潜入するのも、朝早いほうがいいな」

「ということは、西山も午前中、早いうちだ」

「ふむ」雨森が鼻を鳴らした。「ゴルフ場である必要はないない。つそのこと、出発前、自宅でやっちゃうか。一橋さんは、中道と西山の自宅も調べてくれたし」

「やめた方がいいよ」瞳がすぐさま答えた。「住宅地の真ん中だから、知らない人間が変な動きをしたら、一発で通報されちゃう」

「なるほど」吉崎が唇をへの字に曲げた。「自宅もダメ、ゴルフ場もダメ。もたもたしていると、中道の情報を西山が受け取って、殺

す機会がなくなってしまう。まいったな」

吉崎は緊張感のない顔に視線を向けた。「雨森さんは、どう思う？」

「そうだね」雨森は周囲をぐるりと見回した。「どっちもダメなら、別の場所でやろう」

「別の場所？」亜麻音が疑り深そうな顔をした。亜麻音は背が高いうえ、目も口も大きい。おかつば頭の前髪の下から睨まれたら、けっこう怖い。「家から真っ直ぐにゴルフ場に行くんでしょう？ 寄り道なんてしないと思いますが」

「させるんだよ」亜麻音の圧力を柳のように受け流した雨森が、天井を指さした。「笛木の携帯を使って」

食堂に、短い沈黙が落ちた。雨森の言いたいことがわからなかったからだ。十五秒ほどの間を置いて、吉崎がため息をついた。

「そうか。メールで呼び出せばいいのか。ここに」

「そう」雨森がにっこりと笑う。「パスワードは、一橋さんが押さえてある。ゴルフ場はこの近く。スケジュール表では、集合時刻が午前九時となっている。その直前に笛木のアドレスからメールを送ろう。内容は、そうだな、原告の情報が入ったとか、一橋さんが妙な動きをしているとか、西山が飛びつきそうなネタで。そうしたら、ゴルフどころじゃなくなる。笛木が保養所で待っているとせば、

やってくる」

「電話で確認してきたら？」

なおも突っ込んでくる女子大生に、雨森は年長者の顔で答えた。

「電源は、切っておく。那須高原は観光地だけれど、東京在住の西山からすれば田舎だ。電波状態の悪いところにいると思うんじゃないかな。西山は保養所を利用しないんだろう？ 保養所の電波状態を知らないはずだ」

また沈黙が落ちた。今度は納得の静けさ。

千里がふうつと息をついた。

「雨森さんが正しいと思う。それで、ここに来た西山をどうやって殺すの？ 雨森さんの言葉を借りれば、わたしたちは暴力の素人。

西山が暴れたり逃げたりする心配は、同じようにある」

「それは心配ない」

雨森が即答した。「こちらには、西山の理性を吹き飛ばす武器を持っていて」

一瞬の間を置いて、千里が目を見開いた。

「そっか。笛木の死体」

「そう」雨森が天井を指さす。「一橋さんに出迎えてもらおう。自分も笛木と呼ばれたと説明して。そして、西山を笛木が死んでいる客室に連れていく。笛木の死体を見た西山はパニックに陥るだろう。」

抵抗できない状態になる。後は、煮るなり焼くなり好きにすればいい」

「雨森さんって、すごいよね」

瞳が興奮した顔でコメントした。「それ、乗るわ」

「賛成だね」

「いいと思う」

江角と菊野が同時に賛意を示した。吉崎もうなずく。

「よし、それでいこう。五日は、中道班と西山班に分かれて行動することになる。みんな、どちらがいい？」

「少なくとも、一橋さんは西山班だよ。さっきの雨森さんの意見に従うなら」

千里が言い、全員の視線が一橋に注がれた。先ほどと同じ体勢、テーブルに上半身を突っ伏して眠っている。

「中道班は、朝が早いよ。八時くらいには東京の本社に着いていなきやいけないんだから」

雨森の指摘に、菊野が唇を富士山の形にした。早起きが苦手なのだろう。

「でも、俺は行くよ。中道はこの手で焼き殺してやりたい」

「わたしも行くのか」瞳が保護者の顔で言った。「菊野くんは危ないから」

「私も行くから大丈夫だけどね」吉崎が苦笑する。「私は言い出しつぺみたいなものだから、最も罪の重い中道の始末は、責任を持つてやるよ」

「わたしも行きます」

亜麻音が手を挙げた。これで四人。江角が遅れて口を開いた。

「俺も行こう。雨森さんの計画では、中道班は車の運転ができなきゃいけない。確か菊野くんは運転免許証を持っていないだろう。吉崎さんと俺が営業車を運転するよ」

瞳と亜麻音が運転免許証を持っているかどうかは、まったく気にしていない口ぶりだった。女性を軽視しているのか、それとも嫌な役割は自分が引き受けるというつもりなのか。今ひとつ、江角の価値観はわからない。

「じゃあ、西山組は一橋さん、雨森さん、千里さん、絵麻ちゃん、それからわたしね」

低血圧だから、早起きしなくていいのは助かるわ——沙月は独り言のように続けた。あんたは、低血圧というより冷血だろう。絵麻はそう思ったけれど、仲間に対してさすがに失礼だ。すぐさま頭の中で取り消した。

吉崎が壁の掛け時計を眺めた。時計の針は、午後五時を指していた。

「五時か。少し休憩しようか」

「とりあえず、明後日の早朝までは、やることはありませんし」

亜麻音がすぐさま賛成した。反対する者はいなかった。

「六時半から夕食の準備を始めるとして、それまで、自分の部屋で
休むとしよう」

「オツケー」

雨森が立ち上がる。「疲れたから、少し寝よう。六時半になっても起きてこなかったら、誰か起こしに来て」

「いいよ」

絵麻が答え、一橋を除く全員が立ち上がった。

「一橋さんはどうする？」千里が誰にともなく尋ねた。「部屋に連れていってあげる？」

「いいんじゃないかな」吉崎が面倒くさそうに答えた。「気持ちよさそうに眠っているから、起こすのも気の毒だ。担いで階段を上るのも大変だし」

「それもそうか」

これまた反対意見が出ず、眠る一橋を残して食堂を出る。客室のある二階に上がった。屋内はもう薄暗くなりつつあったから、階段と廊下の照明を点けた。窓にはロールカーテンを下ろしてあるから、外から見られる心配もない。

客室は十二室ある。最奥の十二号室は、笛木の死体がある。その部屋と隣の十一号室は空けて、一号室から十号室までをメンバーで使うことにした。廊下の東側、一号室から五号室までを女性が使い、東側最奥の六号室と西側の七号室から十号室までを男性が使うことにしていた。各自の荷物は、もう自分の部屋に運んである。

階段に近いのが一号室だ。特に意味はなかったけれど、女性は番号の若い順に若い人間が入ることになった。亜麻音、絵麻、千里、沙月、瞳の順だ。ちなみに男性は六号室に雨森、西側の並びの七号室から吉崎、江角、菊野、一橋が割り当てられている。

メンバーたちがそれぞれの部屋に入っていった。ルームキーをバッグから取り出すのに手間取った絵麻と千里が廊下に残された。

「それにしても」三号室のドアノブを握りながら、千里がつぶやいた。

「何？」

「考えてみたら、ここには死体があるんだよね。しかも、自分たちが殺した」

笛木のことだ。笛木は十二号室で死んでいる。おそらく、浴槽に張った湯も、すっかり冷めていることだろう。

千里は自嘲気味じちようぎみに笑った。

「本当なら、もっと気味悪がってもいいんだと思う。特に、わたし

「たち女は。でも、みんな平気な顔をしてる」

「……………」

絵麻が答えられないうちに、千里は一人で言葉をつないだ。

「わたしたちの憎しみって、それだけ強いんだ。変な言い方だけど、安心したよ。これなら、残る二人も殺せる。そう思う」

「そうだったら、いいね」

絵麻が当たり障りのないコメントをすると、千里は黒縁眼鏡の奥で目を細めた。

「じゃあ、六時半に」

「うん」

そう言い合って、それぞれの部屋に入った。

〈つづく〉